●編集後記

有朋自遠方来　不亦楽～11月11日、鹿児島から大分の泌尿器学会参加のため、原博満教授が遊びに来られました。15年前にトロントの生活立ち上げの際、大変お世話になった友人です。私のトロント着任後半年後にそそくさと帰国してしまいましたが、それ以来の涙の再会となりました。その日はちょうどオーストリアのIMBAというバイテク研究所の所長で世界的に有名なヨゼフ・ペニンジャー博士が泌尿器学会の特別ゲストで大分に来ていました。博士とは直接の面識はなかったのですが、私とはトロントの時の研究所のボスのタック・マックの兄弟弟子にあたるということもあり、ヨゼフのところで勉強して現在大分大学教授の花田ご夫妻、あと小林教授（私とは現慶応大吉村昭彦教授の兄弟弟子）、計6人でわいわいふぐを食べました（写真参照）。その後、ヨゼフがウイーンにはないけど非常に興味深いガールズバーに行きたい、というので、花田夫妻を除く4人でガールズバーに行ってはめ外しました。ヨゼフの話す英語、半分もわからなかったけど、楽しい一夜でした。

受付時間	月	火	水	木	金	土
9時～12時	●	―	●	●	●	●
14時～18時	●	―	●	●	●	●

休診日／火曜・日祝日

9時より早く来られた方も、診療準備完了次第、順次診療してます。また夕方も6時ぎりぎりまで受付しております。ご気軽に相談ください。

インターネット予約が可能です

かみぞのキッズ　よやく

http://kamizono-kids.com

ホームページ QRコードはこちら

WEB予約 QRコードはこちら

〒870-0822
大分県大分市大道町4-5-27 第5ブンゴヤビル2F

TEL:097-529-8833

children's clinic of Kamizono

かみぞのキッズクリニック

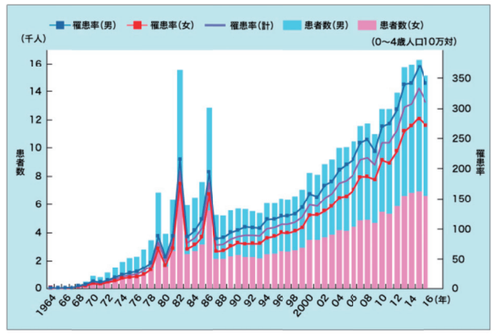
シックキッズニュース

2017年12月号（No.7）

●今月のフォーカス

川崎病患者 2015年に過去最高を記録したことが判明 ～第24回川崎病全国調査で

川崎病とは、高い熱、目や唇が充血する、ぶつぶつができる、手足の先が真っ赤に腫れあがる、首のリンパ節がぐりぐり腫れる、熱が下がった後に指先の皮膚がボロボロはげる、などの症状が5日-10日程度の経過に次から次に起きる赤ちゃんの病気です。昭和36年から37年にかけて、日赤医療センターの川崎富作小児科部長が、乳児の非猩紅熱性落屑症候群として7例を経験。それらの症例報告を昭和37年10月の日本小児科学会千葉地方会で報告したのが初報です。おそらくは何らかの病原体による感染症だろうと思われているのですが、それにしては病気がうつらない、川崎病に特有の病原体が検出されない、などなど、原因病原体の特定はいまだにできず、



なぞに包まれています。一番問題なのは、心臓を栄養する血管（冠状動脈）に瘤ができてしまうことです。動脈瘤ができてしまうと、こぶの中で血が固まったり、破裂したりして大変なことになるかもしれないので、その後、一生血栓防止剤を飲まなければなりません。場合によっては、血管バイパス術が必要になるケースもあり、その後一生心筋梗塞の危険性と隣り合わせに生きてゆかねばならなくなります。

川崎病の原因を、疫学的にアプローチするために、昭和43年（1968年）最初の川崎病疫学調査が行われるようになりました。昭和43年から3年間、東京広尾の日本赤十字病院に入院した川崎病患者57年全員に対して診療録から住所、両親の職業、家族構成、母の年齢、乳児期の栄養方法、既往歴、予防接種歴などを転記して調べることから始まりました。昭和45年（1970年）からは、2年に一度、全国

中面につづきます

の100床以上の規模で小児科を併設する施設（例えば大分県立病院小児科）、および小児科のみを標榜する入院施設のある小児病院（たとえば大分こども病院）を対象に全国調査となりました。そして、2015年から2016年の第24回全国調査の結果が先月公開されました。

過去近年、川崎病は急上昇し続けていたのですが、2015年の患者数は15272人と過去最高でした（グラフ参照）。1～4歳人口10万対罹患率は332.2人（簡単に言うと300人に一人の罹患率）で、これまた過去最高でした。川崎病は過去3回大発生したことがあります。1979年（私が中学1年のころ）、1982年、1986年です。中学1年のとき、ラジオで大発生した川崎病のことを話していて、社会で習った公害の川崎ぜんそくのことかなぁと聞いていたら、赤ちゃんの心臓の血管が破けて突然死する奇病・・・と言っていたのを覚えています。このころ、自分が将来、川崎病の病因論の研究で学位を取るとか夢にも思っていませんでしたが、ラジオでの1979年の川崎病大発生の話題が私を川崎病のはじめての出会いだったのです。大分県は、2013年が173名、罹患率が355.1人、2015年が163名、罹患率が346人と全国平均より高い状況です。今年の春まで4年間病棟医として勤務していた大分こども病院でも川崎病は日常的に見られた病気で、常にだれかが入院していて、多い時は3-4人入院していた日もありました。県発生した川崎病の約半分、だいたい年間80名弱の患者さんを診させていただきました。大分県立病院の先生方と連携してみていっていましたが、こんなに川崎病患者発生が多くなってきたにもかかわらず、大分ではここしばらくは冠動脈病変の重大な合併例は出ていない、ということでした。

開院して半年たちましたが、現時点で川崎病の患者さんは当院には来ておりません。大分こども病院からの情報でも今年の川崎病の発生は多くはないそうです。いまだに原因がはっきりしていない奇病、川崎病。今後の発生の動向に注目です。

●今月のフォーカス2　神奈川県立こども医療センターが 11 月 14 日に公表した“牛乳アレルギーに対する急速経口免疫療法後の維持療法中に生じた重篤な有害事象”について

「採血検査がクラス2に下がったから、家で少しずつ食べさせてみたら～」とか、「インフルエンザワクチンを打つ前に、卵ボーロ2個食べさせてみて～」とかいわれた食物アレルギーのお子さんをお持ちのお母さん方、いませんか？そのような話がまことしやかにはなされているのを聞き、本当に驚いています。今回、経口免疫療法の先鞭をつけた栗原和幸先生のおられる、日本のアレルギー診療のメッカの神奈川県立こども医療センターで起きてしまった食物アレルギーの重大な有害事象の報道があり、特に食物アレルギーのお子さんをお持ちの保護者の方はショックだったと思います。

神奈川県立こども医療センターで生じた事故についてですが、病院ホームページからの情報では、ぜんそくを合併している重症牛乳アレルギー（経口負荷試験で牛乳８mLで症状出現）のお子さんに、入院して１mLから急速経口免疫療法治療開始。17日目には牛乳135mLを飲めるようになって、その量を維持量として、退院して自宅で毎日摂取させることにしたそうです。摂取後2時間は運動を控えて安静にするよう指示。ぜんそくに対して治療開始時に予防薬は強化していたそうです。退院3ケ月後にぜんそく発作が出て自宅で吸入して落ち着き、翌日の行事には参加できたそうです。その翌日、いつものように牛乳135mL飲んだところ、苦しさを訴え、その後呼吸停止。エピペンを大腿部に摂取して、救命センターに救急搬送され蘇生術を受けたそうです。しかし大変悲しいことに低酸素脳症を発症してしまい、現在も治療中とのことです。

同施設では、超重症な食物アレルギー児に対し、誤食などにより重篤なアナフィラキシーにならないよう、研究的治療として、院内倫理員会の承諾を受け、経口免疫療法を実施しています。これまで200人220件の経口免疫療法の実績があり、鶏卵で1名呼吸管理を要した症例1名、牛乳アレルギー児に2度アナフィラキシーを起こした例1名があったそうですが、2名とも回復して、同療法を継続中だそうです。このような重大な有害事象例はこれまで聞いたことがありません。

当院は、大分市内では唯一の小児食物負荷試験の特掲診療科を取得しており、安全に食べられる量や出てくるアレルギー症状を把握し、治療への反応をみてから、その子に応じた食事指導を行っています。陽性のお子さんにはおおむね半年後に負荷試験を再度行い、安全に食べられる量が増えてきたかを確認。その繰り返して、徐々に食物アレルギーを克服する、という食物アレルギー診療ガイドラインに沿ったごく一般的な食物アレルギー診療を行っております。実は今年の7月30日、アラバマのアラスター・ワトソン君という多抗原感作でぜんそくを合併している3歳児の牛乳負荷試験中に重度のアナフィラキシーショックで死亡したことが報告されました。経口負荷試験中に起こった死亡事故はこのアラバマの例が初めてです。スタッフや設備の整った大病院でさえ死亡事故が起きてしまったのです。冒頭ででた、「採血検査で下がったから家で食べてみて―」などという発言がいかに恐ろしいことか、お分かりだと思います。経口免疫療法が一般の人たちにも広がってきたので、こういう話が突如出てきているのだと思いますが、そもそもガイドラインでは、経口免疫療法は、一般的診療では推奨せず、臨床研究として慎重に推奨すべきであり（つまり院内の倫理委員会の承諾を得たうえで行うべきもの）、コントロールの不安定な重症気管支ぜんそくなどの病気を持っている人には禁忌となっています。

自宅でアレルギーのある食品を摂取する際には、食べさせる前に必ず安全な負荷試験実施施設で負荷試験を行い、どれくらい食べられるか、食べたらどういう症状が出るのか、どのようにすればそのような症状が取れるのか、実際に見てから、医師の指示に従って、慎重に解除していきましょう。

●インフォメーション

その1　しばらくの間、土曜日の予約を順番予約とします。

12月16日午後と30日を除く土曜日終日、時間枠予約ではなく、順番予約にいたします。せっかく時間通りに来ていただいても1時間以上待つ方が続出してしまっているためです。順番になっても来られない方の予約はキャンセルになってしまいます。ご注意ください。

その2　当院の12月の診療は30日（土曜）までです。

しかしスタッフが有給休暇を取得するため、通常な患者数はおそらくさばけません。ウェブ予約枠を減らし対応いたしますが、なれない受付・会計をしながらの診療となりますので、特にウェブ予約が取れずに予約なしで来られた場合は待ち時間など大変ご迷惑をかけるかと思います。ご了承ください。

その3　12月16日の診療時間について

12月16日、20時の飛行機に乗るため、午後の診療を17：00受付終了、ワクチンは16：00までとします。午後の診療枠は時間枠となります。

その4　開院して6ヶ月がたちました

12月16日で開院6か月になります。本当によく続いたものだと思います。開院当初は10人来ていただければましなほうで、午後に1人も来ていただけない日もあり、高校野球の明豊高校の快進撃を恨んだものです。そういう状況の中でも、以前いた病院でぜんそくや食物アレルギーやほかの慢性疾患で一緒に頑張って診ていたお子さんたちが少しずつ訪れていただいてきて、涙が出るほどうれしい気持ちになりました。医者は患者に生かされているって話、ほんとですね。何とか6か月やれてこられたのは、なにより来てくださる患者さんのおかげです。この初心をいつまでも忘れずに、謙虚な気持ちで地域医療に貢献出来たら、と思います。これからもよろしくお願いいたします。